

---

# 君と出逢う場所…

斎藤 レン

---

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

## 注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

### 【小説タイトル】

君と出逢う場所

### 【NZコード】

N0746A

### 【作者名】

斎藤 レン

### 【あらすじ】

大学受験を控えた主人公・神城雅樹が名も知らぬ女の子と出逢い、そして…。

俺は神城雅輝。高校3年生。高校3年と言えば受験シーズンである。

しかし俺は今駅前の銅像の前に立っている。

特に誰かを待つていてる訳でもなく、何をしたい訳でもない。

「はあ～…、予備校行くのめんどくさいなあ～…受験勉強ばっかりで出逢いもないし…なにかいことねーかなあ」

そんなことを思いながらふと前を見てみると

「ねえ今時間ある?」

……はい?????

突然目の前に女の子が表れた。しかもかなり可愛いく俺の好みだ。

「ねえ時間あるなら付き合つてよーーー。」

「えー? でつでも俺これから予備校行かなきゃいけないから…」

「いいよ行かなくても たまには息抜きしなきゃ疲れちゃうよ さつ行こつ」

俺は馬鹿だ。

いきなり会つた知らない女について行つてしまつた。  
これが新手の詐欺だつたらどうする気何だおれは…。

「ホラッ、ほつとしてないで早く行けーーー！」  
女は俺の腕を掴んできた。胸が当たつて少し気持ちよかつた。

「なんでーーー？じつしてわかったのーーー？」

俺は今駅からそんなに遠くない喫茶店にいる。  
「ふふつ。さてなんででしょう？」「俺が何故こんなに驚いているのか。

それはさつきあつたばかりの彼女に俺の好きな物や趣味、特技等を  
言い当てられたからである。

彼女が言つこには昔から直感力が強いからわかったのだといつ。

「うーん……マサキー！」

雅  
「じゃあ俺の名前言い当ててみてよーーー！」

雅  
「えー！？何で解つたのーーー？」

女

「だつてそのキー ホルダーに書いてあるんだもん（笑）」

雅  
「なんだ～びっくりした（笑）」

雅  
「改めて自己紹介するよ。俺は神城雅輝。君は？」

女  
「私？私はねえ……。内緒（笑）。」

雅  
「いや……内緒はないだらう……ちゃんと教えてよ。」

女  
「いいじゃんいいじゃん。名前なんか。とりあえず別のところに行かない？ねつ？」

結局彼女は名前を教えてくれないまま俺は彼女と一緒にいろいろなところに遊びに出掛けた。  
カラオケ、買物、ゲームセンター。  
さらには野球がやりたいといい始めたので野球をやることにした。

女

「雅輝～、投げていいよ～」

雅

「ばかめ。俺はこれでも中学は野球部だつたんだぞ。くらえー！」

雅  
力キーン！

雅  
「えつ！？」

女

「ヤッター！何だたいしたことないじゃん。」結局投げた球全て打たれかなりへこんでいた。

女

「今日は調子が悪かつたんだよ。」

その彼女の言葉がいまの俺にはとても痛かった。

気がつけば夜になっていた。あたりも暗くなり、人通りも殆どなかつた。俺は隣りにいる彼女の顔を覗き込んだ。

雅

「楽しかったね。俺こんなに楽しかったの久しぶりだよ！」

女

「ふふつ。私も楽しかったよ！でもちょっと疲れちゃったかな…。」

ねえ私シャワー浴びたくなつちやつた。

雅  
「え！？」

辺りを見回してみるとホテル街だった。  
”いつのまにこんなとこまで来たんだ！？てかもしかして俺もいつ  
う……”

雅 ”シャー——

「ここにタオル置いとくね。」

女  
「ありがとー」

彼女はシャワーをあびている。  
しかしここはホテルではなく俺の家である。  
彼女が俺の家に来たいというので連れてきたのだ。

雅  
「はあー…残念だったなあ……」

女

雅  
「何が残念だったの？」

「いついやなんでもないよ。」

女

雅

「怪しいなあ～何かエッチな事でも考えてたんじゃないの？」

雅 「そつそんなわけないじゃん！」

”やつべ。何で解ったんだろう？”

そんな事を思いながら俺は脱衣所を出た。

母

「誰かお風呂入ってるの？」

雅

「うわあ……！」

俺は思わず大きな声を上げてしまった。

雅

「どうどうしたんだよおふくろ。もう一、二時過ぎてるじゃん！？寝てなかつたの！？」

母

「喉が渴いたから何か飲もうと思つてね。」

雅

「じゃ、じゃあ俺持っていくから布団に戻つてなよ。」母  
「めずらしいわねえ、ゆきでもふるんじゃないから。」

：

雅

「ふつゝ、危なかつたあー。心臓止まるかと思つたぜ。」

”ガチャ”

俺は再び風呂場のドアを開けてみると彼女の姿はそこになかつた。

雅

「あれ? どこいつたんだ?」

雅

「雅輝～」

雅

「お前に出たんだよ、てかなんで俺の部屋の場所知つてるんだよ！」

女

「まあ前にしないきにしない（笑）ねねアルバム見てもいい？」

雅

「好きにしてくれ……」

もう彼女のやりたいようにさせたいことにした。

雅

しばらく俺は彼女と一人でいろいろな話題で盛り上がつていた。  
しかしやはり彼女の素性だけはしがれることができなかつた。  
何だかんだで気がつけばあれから2時間以上たつていた。

女

「私そろそろ行くね。」

雅

「私そろそろ行くね。」

「えつ！？帰るの…？」

女  
「いじめんね。」

雅

「また、会えるよね？」

女

「……。」

突然俺の唇にふとやわらかいものがさなつた。それは彼女の唇だつた…。

女

「また会えるかは君次第だよ…。」

そういうと彼女は行ってしまった。

俺はその場から一步も動けなかつた。

ただ彼女の唇のやわらかさと温かさだけが残つていた…。

あれから一週間が立つた。俺はあの時から彼女と初めてあつたあの場所にずっといる。何だかここで待つていれば彼女に会える。そんな気がしたからだ。

雅

「やつぱりここにいてもダメかなあ。はあーまた会いたいな。」

そんな事を考えていた。

雅

「そういうえば前もこんな事が会つた来がする。あれはたしか…」

そつあれば確かに卒業式の前日にクラスの女の子にラブレターをもらつた。

けれど俺は行かなかつた。

いや、正確には行けなかつたのだ。

あのとき俺は目覚ましを間違えてしまい寝坊してしまつた。

次に起きてみると時間はもう既に過ぎており待ち合わせ場所に彼女の姿はなかつたのだ。

まさにあの時と同じ心境であつた。

雅

「あれ？…そついえばあの娘の名前なんだっけかな。えつと…。あつ…そつだ確か武内…」

「武内由起子」

突然後ろから声がした。

由起子

「よつやく思い出してくれたね。」

雅

「ああ。よつやく思い出したよ。すつゝい綺麗になつてたからわからなかつたよ。あの時は本当にごめん。」

由起子

「ううん、謝りなくて良じよ。もつまにしてなこから。もつ一回こ  
えぱいことだからね。」

由起子

「じゅあ言つよ。私は雅輝君が好きです。」

雅

「ああ。俺も君の事が大好きだよ。」

由起子

「あは、嬉しくて涙出ちゃった。」

俺は彼女の涙を拭い、そして彼女にキスした。

(後書き)

読んでくださった方ありがとうございました。このあと二人がどうなるかは皆さんの想像にお任せします。初めて書いたので不適切な表現があつたかもしれません、あまり突っ込まないで下さい（笑）これからもいろいろ書いていきたいと思うのでよろしくお願いします。

## PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連＝横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能してください。

---

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。  
<http://ncode.syosetu.com/n0746a/>

---

君と出逢う場所…

2010年12月29日21時06分発行